〔国語教育〕

言語活動の指導としての国語教育

佐藤喜代治

（一）

現在、国語教育の研究は理論的にも実践的にも至る処で盛んに行はれてゐて、その点では、恐らく他のどんな教科にも劣らないやうに思はれる。それだけ国語教育は、研究の対象が無限の複雑さを持ち、問題が困難なのであらうと思ふ。研究や論議が盛んであるに似合はず、成績は必ずしも向上の跡を示さず、多くの場合に共通の問題が採り上げられ、同様の論議が繰り返されてゐる事実も見逃がすことはできない。国語教育には何か動かない原則といふべきものが無いのであらうか。もっと科学的な方法が無いのであらうか、これがわれわれの素朴な疑問である。このやうな疑問に対して、多くの専門家は、すでに縦横の論議検討を尽してゐると答へられるかも知れない。しかし現実の問題が複雑であり困難であればあるほど、更に原理にさかのぼって問題の由って生ずる所を吟味することが必要ではあるまいか。最近、実践的な立場に立っての指導書が相継いで現れる割合には、基礎的な研究が少いやうに思ふのは、観察が狭きに失するのであらうか。特に、戦後の国語教育は教育学的な配慮によって改革されてゐる面が大きいために、その面における一般の関心は強いが、それだけ言語の面がおろそかにされてゐる傾きがある。このやうな言ひ方に対して、あるいは異論があるかと思ふ。戦後の教育で、言語活動とか言語生活とか、言語が重要な課題となって来てゐることは事実である。しかし、それは十分な学問的な裏づけを伴はず、にはか仕込みで教育の現場に持ちこまれたために、教師たちが戸迷ひしてゐるのが実情ではなからうか。国語教育において言語が強調されるのは当然である。むしろ問題は、このやうな言語の指導が十分の用意なくして行はれる点にあるので、現在まで行はれて来た言語研究と言語教育との間に横たはる溝を埋めることに今後の努力が傾けられなければならない。それは相当の時日を要することであらう。ここではそれらの問題に関して若干の点を試みに論じて見ようと思ふのである。

（二）

言語といふ見地から国語教育を観察する場合、第一に問題になるのは国語教育の目標である。極めて常識的な言ひ方であるが、国語教育は国語の教育である。教育が全体として人間形成を目的

とする以上、国語教育においてもそれを忘れてはならないどころか、いくら重く見ても重く見過ぎることは無い。けれども人間形成といふことは教育全体の目標である。教育が多くの教科に分けて行はれる場合、各教科にそれぞれの独自性があるべきことはいふまでもない。戦後、生徒の生活に即した教育が重んぜられ、教科相互の連関が考慮されるに至ったことは、それが実際にどれだけ行はれてゐるかは別として、それなりに意義があると考へられる。それに伴って国語教育が大分間口の広いものになったのも然るべきことと思はれる。ただ、教育が生活の実際に即した、総合的な形で行はれる場合、そのために国語教育の独自性が見失はれるやうであってはならない。生徒がその生活の中から何らかの問題をとらへ、それを中心として教育が進められる時、生徒自身はその問題において、何を目あてとして学習しようとしても、それは問ふ所でない。しかし、教師はそこで国語教育の名にふさはしい、社会科や理科とは異なった、独自の教育を行ふことを明確に意識してゐなければならない。

それでは国語教育の独自性がどこにあるかといへば、国語を離れて国語教育があり得ないといふ点については多く言ふを要しないと思ふ。ここではこの点について深く立ち入ることを避ける。けれども国語に焦点をおいて教育を行ふといふことにも多少の問題が無いわけではない。たとへば、作文の指導にしても、それが国語教育として行はれる限り、文章による表現の能力に重点がおかれるのは当然である。ところが、作文に限らず、言語は一般に人間の体験の表現であるために、その表現と、表現する人間とが緊密な関係を持つ。これは人間形成を目さす教育にとって見逃がすことのできない、重要な点である。生活に即した教育を行はうとする時、生活指導において果たす作文の役割はとりわけ重要である。そこで生活指導を目標として作文教育が行はれることにもなる。その場合には作文として表現された言語よりも、表現のもととなる人間の心や事件など、生活そのものに重点が移って、国語教育が本来目ざすべきである言語の面がおろそかになってしまふ。すぐれた作文を書く条件としては、うまい文句や気のきいた言ひ廻しよりも、むしろ表現される事柄に対する綿密な観察、健全な感動、適当な判断の方が一層重要である。且つ正しい物の見方考へ方を養ふことが教育本来の目的でもある。しかし、この、心を養ふといふことが表現といふ過程を通して行はれることによって、国語教育独自の目的が達せられると同時に、教育全体の目的も達せられることになるのである。これは作文についてばかりでなく、読むことの指導についても同様にいふことができよう。たとへば、古典を学習する場合、その理解のためには、古語の、一つ一つの語や文法について知るだけでは足りない。古代の風俗習慣、制度、思想、その他の歴史的事実について相当の知識を必要とする。しかし、古典学習はもともと何のために行ふかといへば、単に古語や古典文学についての知識を得るだけでなく、古代人がどのやうに考へ、どのやうに行ったかを知ることにその目的がある。従って目的と手段、結果と前提とは相対的な関係にあるので、古典の学習を目的とする時、歴史の知識は手段となり、歴史の研究を目的とする時、古典の知識は手段となる。生徒自身にとっては、いづれが目的であり、いづれが手段であるといふ差別は無いはずであるが、国語教育といふ立場からいへば、古典の知

識が直接当面の目的となるべきことはいふまでも無いであらう。前に述べた作文についても、同様の意味で文章の表現といふことが直接当面の目的であるべきである。文章表現の能力を養ふこと及びその養はれた能力が何の役に立つかといふことは、教育全体の問題として教師の無視し得ないところではあるが、それは作文教育にとって直接の関心事ではない。作文において、ことばよりも、その根柢となる心ばかりが重視される時、作文教育が国語教育以外の目的に利用されるおそれがあることを注意しなければならない。

作文教育と同様のことは文学教育についても言ひ得るであらう。国語教育の中で文芸が重要な内容を占めて来たのは、簡単にいへば、それが言語の芸術であるといふ性格による。単に表現された思想内容だけを問題にするといふのであれば、ひとり文芸にだけ優位を与へる理由は無い。哲学・宗教なども同列におかるべきものである。又、芸術といふ点から見れば、絵画や音楽なども同等に扱ふべきものである。文芸にはさういふ面があることも事実である。従って文芸を芸能科の一部として取り扱ふといふことも考へられるが、文芸の性質や、教育の実際から考へれば現在のやうに国語科の中に含めるのが最も当を得た措置であらう。それでは文芸が実際上の便宜から国語科に同居してゐるに過ぎないかといへば、専門的な観点からは確かにそのことを肯定せざるを得ない。しかし、文芸と言語とを合せて一教科とするのは単に実際上の便宜ばかりでなく、理論的にも然るべきことと考へられる。文芸の鑑賞・批評や創作活動の指導は広い意味で言語教育に外ならないし、又それによって言語教育が完全を期し得るからである。従って又、文学教育が国語教育の中で行はれる限りは言語に即してその指導が行はるべきであり、文学教育としてもそれが望ましいことと考へられる。

文芸が人間にとって重く見られるのは、その表現の与へる効果が、他の理論的な表現に比べてはるかに大きいからである。その効果を生ずるものは、直接には言語であるが、言語によって表現された作者の心あるいは作者の体験した事実が大きな感動を与へる場合が少くない。その感動によって読者や聞手の見方考へ方が深められ、広められるので、それが教育において重く見られるのは作文の場合と同様である。従ってこの場合にも人間形成が直接の目的と考へられ易い。文芸が一つの社会的事実として人間生活の一部を形づくってゐる限り、生活の他の分野と調和を保ちつつ生活全体の向上に役立つべきことは当然である。人生から切り離して文芸を考へることはできない。人間の生き方といふことが広い意味で倫理といひ得るならば、文芸は倫理的でなければならず特に教育においてはこの点に対する周到な注意が必要である。しかし、それが文芸の独自性を否定するものであってはならない。自由な心でのびのびと芸術の世界に遊び楽しむことが大切である。同じ草木でも、根や茎、幹や枝にはそれぞれの機能があるやうに、花には花の機能がある。花は根や茎と共に植物全体の生命を維持するに役立たなければならないが、花は美しくて他の注意をひくといふことによって他とまぎれることの無い、独自の機能を発揮するのである。文芸もまた言語の芸術であるところに独自の機能が見出されるので、この独自の機能を持つ文芸の芸術性の享受・鑑賞・批評について指導することが文学教育に外ならな

い。文芸の人生における意義が重大であればあるほど、正しい適切な指導が必要なので、人間形成を重んずるが故に、かへって片寄った、あるいはゆがんだ指導に陥ることを警戒すべきである。

(三)

国語教育が言語に焦点をすゑて行はれるべきことは今まで述べて来たところであるが、更に進んで言語そのものの正体を明らかにしなければ、正しい言語教育を行ふことができない。言語の性質を明らかにした上で、これを教育の場に応用するのが当然の順序である。それは病人の診察に先立って医学の研究が必要なのと同様である。勿論、医学の研究が完全に行はれなければ、医療が施せないといふものでもない。実際には医学の発達の程度に応じて医療が行はれてゐるのであり、又、医療の実際上の必要によって医学の発達も促進されるのである。国語教育においても、最初にもふれたやうに、研究と実践との緊密な提携が望ましいわけで実際家に学問的な反省が必要であると同時に、研究家も実際の中から問題を採り上げる勇気を要するであらう。

ところで、言語の性質について考へる場合、言語は直接には音声現象である。ただ音声が音声だけに終らず、人間の心を表現し理解する手段として利用されるところに、言語としての独自性が認められるのである。音声を通して表現され理解される人間の心が意味と呼ばれるものである。言語には常に意味としての人間の心がつきまとふので、言語を問題にする時は、その背景にある人間の心、又その心に投影する、もろもろの社会現象、自然現象を見逃がすことができない。意味の方に注意の重心が傾く時、たとへば文学教育においても、その言語表現より表現の根柢にある思想の方が主要な問題となる。しかし、言語において人間の心が問題になるのは、それが音声と結びつき、意味と認められる限りにおいてであって、常に表現を前提とする。表現を離れる時、意味はすでに意味でなく、単に人間の心であるに過ぎない。言語活動の実際上の目的は音声を発し又は聞くことではなく、音声を通して人間の心又はそれを媒介とした事実を表現し理解することにある。人間の心又はそれを媒介とした事実が重要であればあるほど、それは正しく音声として表現され、又正しく音声を理解することが要求される。人間の心と音声との結びつきが正しく適切に行はれることによって、表現と理解といふ言語活動が正しく有効に行はれることになる。人間の心を音声として表現する過程、又音声を通して人間の心を理解する過程にはどのやうな法則がはたらいてゐるか、どんな法則に従って言語活動が営まれてゐるか、その法則を明らかにすることが言語研究の任務であり、それによって明らかにされた法則を生徒に体得させ、それを基として実際の言語活動を正しく有効に行ひ得るやうに指導するのが国語教育のしごとである。法則を明らかにするといふこと、更に進んでは現在の法則を批判し、改善の方法を考究することも、教育上意義のあることと考へられるが、大部分の生徒にとっては、習得した法則を実際問題の解決に役立てることの方がより重要であらう。

文法もこのやうな法則の中の一つに外ならない。機能文法か、体系文法かといふことも、昨今熱心に論議される問題の一つであるが、実際に文法が幾種類もあるわけではない。何々文法といふ名称が巷にあふれてゐるが、それは文法に対する考へ方があまり

に安易に堕してゐる事実を証拠だててゐるやうにも見える。現実にあるものはただ日本文法だけであることを銘記すべきである。問題は、実際の言語活動から帰納的に文法といふ法則を見出すやうな方法で学習を指導するか、あるいは最初に法則を提示して、これを実際の言語活動に応用する、演繹的な方法で指導するかといふ点にある。いづれの道を採るかは言語の問題よりもむしろ教育学者の意見を聞くべき問題である。いづれの道を採るにしても言語活動の実際的な経験と、法則の学習とは共に引き離すことのできない性質を持ってゐるので、両者は数学における公式と応用問題とに似た関係にある。現在の処、実際の言語活動から法則へといふ方式が主流を占めてゐるやうであるが、学問的にも容易でない、この方法が教育の上で容易に成功するとは思はれない。そこで法則から実際の言語活動へといふ過去の方式へ帰らうとする声も高く、実際には相当広く行はれてゐるやうである。しかし、それが法則の教授に止まって実際の言語活動に進まないならば、戦前の文法教授と同様に効果の上らないものに終るであらう。

表現及び理解の過程にはたらく法則を実際の言語活動を通じて習得させることが国語教育であることは今まで述べて来た通りであるが、それには表現及び理解がどのやうにして行はれるか、その過程が明らかにされなければならない。この場合第一に明確にしておくべきことは、言語の意味として人間の心と、表現手段としての音声との関係である。人間の心は本来心理学の問題であるが、そのはたらきは常に千変万化する。考へたり感じたり、質的な相違があるだけでなく、考へ方感じ方に浅さ深さの差がある。同じ人間でも、心は決して静止してゐないので、思想感情が絶えず変化してゆく。個人個人で、心に思ふことが相違するだけでなく、時代によっても地域によっても相違が認められる。このやうに心は限り無く変化してやまないのに対して表現する手段としての音声は決して無限に変化し得ない。人間の音声はかなり複雑微妙に変化するので、複雑微妙に変化する人間の心を表現するには最も適してゐる。しかし、心の変化に応じて音声が変化するわけにはいかず、言語によって用ゐられる音声の種類や組み合せ方に限度がある。従って言語が心を表現するといっても、心のすべてが表現されるわけではない。言語によって表現されるものは心に思ってゐることの一部分であって、その他のものは大部分表現されないで残ってしまふ。わづかな、不完全な表現手段によって、できるだけ多くの思想を表現しようとするところに表現の技術も考へられる。また心に思ふことをできるだけ多く表現するか、殆へ目に表現するかは、時により人により、時代によっても相違があるが、全部を残さず表現することは言語の性質上不可能である。言語によって表現されるのは話し手の最も強く意識した部面である。言語として話すことによって話し手の意識が明確な形をとることも言語の効用である。理解する立場に立つ者は、表現された言語を通して、表現されない多くのものを補はなければ、十分に納得するやうな理解には到り得ない。互に向ひ合って話を聞いてゐる場合には、話し手の環境や背景、あるいは表情身振が理解を助けてくれる。ラジオを聞き文章を読むやうな場合には、補助手段が無いので、理解が困難である。古い時代のことや、遠く離れた土地のことは、周囲の事情がわからないので、理解が一層困難である。理解の補助手段が無い時は、言語だけをたどって理

解しなければならないが、表現する者は表現手段としての音声が有限であるために、全体的な、具体的な内容の一部を抽象して表現することになる。複雑な、こみ入ったものについては、これをより単純な要素に分解し、一般的な形に引き直して表現する。従って具体的なものであればあるほど、多くの語を重ねて表現しなければならなくなるが、大抵の場合は、ある部分が表現されるだけで、多くの部分が表現されず、與にひそんだままである。同じく抽象的に表現するといっても、たとへば「花」「赤い花」「ばらの花」といふやうに抽象化の程度には相違があるが、抽象的といふ点では共通してゐる。物語、小説のやうに具体的な事実を表現したものでも、その敍述は意外に抽象的である。たとへば、

ぼくが山の方へいったら、さくらの木があって、花がいっぱいさいていた。天気のいい日だった。（坪田譲治童話）

といふ文を読んでも、その事が明らかであらう。これを理解するためには、抽象的なものを具体的なもので肉づけし、一般的なものを特殊なものに還元してゆくことが必要になる。文章を絵にかき、劇や紙芝居にしくむことはさういふ意味で有益である。文芸作品の映画化されたものは、映画を見ることが役立つであらう。もっとも一般的な抽象的な表現は想像の余地を多く残してゐるが映画化され劇化されたものは、案外自由奔放な想像を打ち破って幻滅の感を味はせることもあって、常に歓迎すべきものとは限らない。詩・和歌・俳句の類を散文に改めることも普通に行はれてゐることと思ふ。理論的な文章になると、単に言語が抽象的一般的であるばかりでなく、表現される思想そのものが既に抽象化され一般化されてゐる。しかし、それらは必ず具体的な事実を前提としてゐるのであって、現実にもとづかない理論は誤りか無用である。理論的な表現では、ただ言語の意味を分析して理解するだけでなく、具体的な事実に即して把握する必要がある。「権利」とか「義務」とかいふ語も、その意味を更に抽象的な語に分解して言ひかへて説明するだけでなく、具体的にはどういふことか、例をあげて説明することが必要になる。動詞や副詞など、抽象的な意味をもつ語は、たとへば短い文例を作ることによって把握させることがあるが、それも同様の根拠にもとづくものである。それは生徒の程度にもよることで、抽象的にものを考へる習慣のついてゐる生徒にあっては、一一具体的な事実に即して指導するに及ばないことは勿論である。以上は主として言語を理解する場合について述べたのであるが、表現する場合には遂に具体的な心もしくは事実をどの程度に抽象化するかといふことが問題になる。色々な事件についてただ「おもしろかった」「うれしかった」としか書けない生徒には、読む人がなるほどと感ずるやうに具体的に表現する習慣を身につけさせることが必要になる。

（四）

国語教育について、単に言語の法則を習得させるだけでなく、それを実際の言語活動に役立てる能力を養ふべきことは前に述べた通りである。そのためには、あらかじめ言語の法則が明らかにされるべきことも今まで述べて来た通りである。しかし学問と実際、知識と技能、これらは常に若干の距離を保ってゐて、決して完全に一致することはできないであらう。学問は複雑な現実からある一面だけを抽象して一般的なものを見出さうとするに対して

実際は一つ一つが特殊な様相を示し、無限に多くの要素から成り立ってゐるために、学問的に十分究明されない、また研究の対象からもれてゐる要素が常に残るからである。しかし科学が発達するに伴って、たとへばヴィタミンについても非常に多くの種類が発見されたやうに、現実を構成する要素や法則が次第に発見されてゆくと思はれる。かつては特別の才能を持ち熟練を経た者でなければ作り出すことのできなかった物でも、その製作過程が明らかにされるに至れば、同じ製品が機械的に大量に生産されることも可能になる。人事現象は自然現象よりもはるかに複雑な法則に支配されてゐるので、言語活動についても、その技術が何か品物を作ると同じやうにいかないことはいふまでもない。しかし、これも科学的に究明されていったならば、今までは全く個人的な才能や熟練にだけ任せられてゐた事柄にも何らか一般的な法則を見出す可能性が無いとはいへない。従来の国語教育研究では、教育の方法・技術といふ面では相当に調査・研究が行はれてゐるやうであるが、同時に指導すべき言語活動そのものについても実際に即した調査・研究が行はれてよいと思ふ。少くも言語の問題か、教育の問題かを見分けてかかる必要がある。言語の問題を教育の問題と混同して、教育の技術だけで問題を解決しようとしても、結局徒労に終るであらう。言語の研究に当って特に注意しなければならないのは、実際に即して行ふといふことである。従来、言語の事実は静的なものとして観察されて来たために、音声、語、文などに関する分析的な研究には著しい進歩の跡が見られる。けれども言語はもともと動的なものとして、具体的な言語活動の中でとらへられるはずのものであり、さうでなければ言語研究は実際の言語活動に役立たないことになる。その意味では言語研究が現実に更に近づく必要がある。従来研究された分野においても研究を一段と進める必要があると同時に、新しい分野に観察の眼を向ける必要も生ずる。たとへば、文章の解釈では、文字の読み方語句の解釈、また文法の研究などの外に、大意の把握、文意の要約といふことが行はれる。これは古典の場合も必要であるが、現代語の文章では特に重要である。ところが文章を段落に切り大意をつかむといふ学習活動が中々簡単には行はれない。段落の切り方、大意のつかみ方について、もし客観的な基準が見出されるならば、学習は一層容易に円滑に進行するであらう。具体的な言語表現は多種多様を極めてゐるから、それらの間に形式上の共通性を求め、大意についての客観的な法則を見出し得るかどうかは保証し得ない。ただ、これも極めて常識的ないひ方になるが、すべての言語表現には何らかの叙述が行はれてゐる。その叙述には主題といふべきものがあり、その主題にも、叙述にもそれぞれ修飾的な表現が加へられる。その修飾的表現には時間、場所、理由、条件、目的、方法、結果など種々のものが考へられる。これらの主題、叙述、修飾は、文法上の主語、述語、修飾語に準じて考へることができる。文法上の文にあっては主語、述語、修飾語を客観的に指摘し得るに反して、具体的な言語表現にあっては主題、叙述、修飾の各部分を必ずしも客観的に規定し得ないところに両者の相違がある。小説や物語において作者が何を主題としようとしたかはしばしば論争の種となる。しかし、漫然と大意を把握しようとするよりも、主題、叙述、修飾といふやうに手がかりを求めて文章をたどる方がはるかに有効であらう。これは簡単な文章

についても、複雑な文章についても同様に行ひ得ることである。複雑な構成を持った文章は、簡単な構成をもつ文章を幾つも重ねて表現してゐるわけであるが、その重ね方には、後の表現が前の表現の発展として接続するものと、反対の意味で接続するものとがあって、これも文法上の接続における順続と逆続とに準じて考へることができるであらう。この場合、接続詞が重要なはたらきをなすと思はれるが、文章の接続には常に接続詞が用ゐられると限らない。従って接続のし方を判別すべき基準を表現された言語の上に見出すことができず、思想内容にたよって判断する必要も生じて来る。又、接続のし方にしても、順続、逆続のいづれとも判定し得ない場合があると思はれる。これらはすべて今後の研究に残された課題であって、以上述べただけでは殆ど何らの効力が無いかも知れない。もしこのやうな研究が今後可能となり、それが理論的にも実証的にも証明し得る段階に至るならば、文章の筋道をたどることももっと合理的な方法で行はれるやうになるであらう。その場合には、言語研究の範囲を越えて、他の科学との協力、総合が必要になることも予想される。

すべての言語表現に通ずる一般的な法則を見出すことに努めると同時に、それぞれの言語表現における特殊性を見出す研究も行はれなければならない。それは言語表現の構造あるいは形式の研究に対して様式の研究ともいふべきものである。言語表現は個々の場合にそれぞれ異なってゐて容易に律し難いのであるが、それでも大きな類別はできるであらう。それは従来も部分的には試みられてゐるが、その研究をもっと体系的に行ふ必要がある。文芸の分野においては様式の研究が相当に進んでゐるやうであるが、言語表現全般について様式の研究が行はれるべきである。第一に言語表現の様式にはどれだけの種類があり、それらが相互にどのやうな関連を持ってゐるかを明らかにすべきである。この点が明らかになった上で、種々の言語表現のうちからどれだけの種類をどんな順序で各課程に配当するかを、教育学的考慮を加へて決定すべきである。言語経験の分析といふことも種々試みられてゐるやうであるが、現実には単元の選び方や配列はかなり便宜的であることを免れない。実際を重んずる教育として理論に偏することができないのは当然であるし、実際の事情から見てやむを得ない場合もある。しかし、それは一往理論的検討を経たものであることを要する。さうでなければ単なる御都合主義に終る危険がある。国語教育の各部門において生徒の入学から卒業に至るまでの指導について一貫した体系を考究すべきである。どの教科書もそれぞれ指導体系を十分考慮して編集してあると思ふが、それは色々の制約を免れない。その点では必ずしも全面的に教科書に頼り切れないところがある。また指導体系を考究した上で教科書を活用すれば、教育も一層効果のあるものとならう。地方や学校によって事情の違ふ場合もあるので、そこに教師の工夫をこらす余地が残されてゐる。作文の指導などについても、どれだけの種類をどの程度まで指導するかについて一貫した計画が立てられてゐるのであらうか。表現力の向上をはかるには、この点をも考慮すべきであるまいか。

様式研究の第二の問題は、それぞれの言語表現は様式上どんな特徴をもってゐるかといふことである。芸術的な文章、理論的な文章、又実用的な文章にはそれぞれ異なった性格が認められる。

従ってそれらの種類の相違に応じて、理解の場合も表現の場合も異なった知識・技能・態度が要求される。従って又指導の場合にもそれぞれの様式的差異に応じて力の入れ所が違ふといふことになる。前に述べた大意の把握にしても、それは理論的な文章において特に重要度が高いので、芸術的な文章になると、細部の敍述に多くの注意を払ふ必要があるかもしれない。又話し方の指導についても、それぞれの、話す場に応じてどのやうな能力を必要とするのかを明らかにすべきである。今までに言語技術の研究も熱心に行はれてゐるが、実際的な技術を構成する要素はどんなものか、どの点に特に力を入れればよいかを更に究明することが望ましい。

第三の問題は、言語表現の様式が過去においてどんな発達をとげ、現在どんな段階に進んでゐるかを明らかにすることである。これと連関して日本語の表現様式が総体として外国語に比べてどんな点に特色があるかを研究することも有益であらう。これらの問題が研究されるならば、言語表現の様式が将来どんな方向に発達すべきものか、又どこに改善の余地があるかについて見通しを与へることができるであらう。

（五）

医者が病人を診療するに当って、病気の箇所だけを診断し治療する前に、先づ病人を一個の人格として待遇する必要がある。教育の場合は殊にその心得が肝要であって国語教育も単に言語の知識・技能の指導に止まってはならない。けれども医者にとっては病気を治療することが直接の任務であると同様の意味で、国語の教師のさし当ってのしごとは国語の知識を与へ技能を養ふことである。それが教育である限り、教育的配慮が必要であることはいふまでもないが、それは国語についての周到な研究を前提としてのことである。特に戦後は指導すべき国語の内容も戦前と著しく変って来てゐる。又言語に対する考へ方も戦前と決して同一ではない。いづれの面から見ても国語の新しい研究が要請されてゐるやうに思ふ。教師もともより自ら進んでこの研究に向ふべきであるが、同時に、教師が安んじて教育に携はるやうに、現実の問題の解決に努めることが国語研究家にとって尊いしごとではなからうか。もしこのやうな究研が既に行はれてゐるといふのであればそれがいよいよ発展の道を進むやうにこひねがふだけである。

—東北大学教授—